

番号	130	夜燈鼻燈台跡 「照海燈」の碑		
所在地	太良町大浦甲 竹崎			
災害別	文政１１年（１８２８年）台風（シーボルト台風）による暴風			
目的別	記念碑		建立年	明治２年１１月
特記事項				



太良町竹崎にある史跡「夜燈鼻燈台跡」。「照海燈」と名付けられた石碑には文政11年（1828年）子年の大風で燈台が倒壊したことが記されている。碑文は漢文で書かれており、概要を記したものが説明パネルに記されているのでそちらを掲載する。

「外海から流れ入る有明海の潮流は、竹崎沖で東西に大きく分かれ、佐賀方面と諫早方面へと流れて満潮となり、干潮には逆流して竹崎沖で合流し外海へ出る。この分岐と合流の複雑な浪立ちが「竹崎沖の三角浪」といわれた。更に近くに鶴ノ瀬の岩礁があり、海難の難所と恐れられ、海難事故が多かった。 もともと夜燈鼻と佐賀（厘外）港には燈台が立ち、それぞれ近くの寺が管理して来た。その後、しばらく中絶していたのを寛永年間（一七四八～五〇）、諫早領の家老 早田番左衛門が再建したが、文



国土地理院電子国土 Web

政十一年（一八二八）の大風で倒れたので、明治二年（一八六九）番左衛門五世の孫 早田市衛門が再建した。これが我が国燈台史上初の十一面ガラス鏡式洋風燈台である。それまで竹崎観世音寺で管理してきたが廃止となり、昭和二十九年（一九五四）海上保安庁により新燈台が設立され現在に至っている。その跡に佐賀藩、国学副教授 武富 圀南^{たけどみ いなん}の筆による照海灯の碑が建っている。 指定 昭和五十年二月四日 平成八年三月吉日 太良町

